

原著

現代児童文化の一考察

工藤真由美 *

A study of the modern Japanese culture for children

Mayumi Kudo

近年子どもの変化が、身体発達、心の発達など様々な点で指摘されるようになってきた。このようななかで、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」にも示されているように、子どもの遊びの重要性は時代が変わっても変わらないものである。子どもの遊びの重要性を今日の社会環境の中で実現するには、大人の子どもの遊びに対する再考が求められる。まず、自己形成としての遊びは、①身体化される遊びであることが重要である。すなわち単に体を動かすだけでなくそのことを通して他者と交わり他者に存在を認められる行為としての身体活動であること。更には②身体化された遊びから想像力の世界へとつなげていくことが重要である。すなわち五感を働かせ、そこに無いものや目に見えないものへのあこがれや恐れなど想像力を豊かにすることである。それらは日本の伝承遊びなどに見られるが、まず大人がそのような遊びの価値に気づき、子どもへ働きかけることが重要である。

Key words: 児童文化、身体性、想像力、伝承遊び

(1) はじめに

近年、子どもが変わったとよく言われるようになりました。それらの原因は一つではないにしても、子どもを取り巻く環境が変わったことに起因していると思われます。かつての子どもは、自然に囲まれ他者の多様なまなざしに触れ、それらのさまざまななかかわりに対して、自らもはたらき返す応答のうちに成長を遂げていきました。今はそのようななかかわりが乏しくなっています。いわば関係性の希薄化です。

子どもは遊びを通して様々なものを習得し成長していきます。上に述べた関係性の希薄化は、子どもの遊びのうちにも見られるようになっていきます。自然と触れ合う遊びから、室内遊びへ。この変化は子どもたちに、自然とのふれあいの減少や、他者との多様な関係性を生む遊びや全身的な活動の減少を促しています。また、遊び場の減少、冒険心や想像力を育む場の減少、かわってレジャーランドの出現。既製品のおもちゃやゲームに囲ま

れた遊び等々。枚挙に暇がありません。このような状況において、子どもの人やものとの関わり方が変化してきています。今我々は子どもたちの遊びを再考することが重要ではないでしょうか。このような問題意識の下、今日まで長い年月をかけて蓄積されてきた児童文化にできることはないか、その課題を探っていきたいと思います。

(2) 幼児教育における遊びの重要性

幼児期における遊びの重要性は、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」にも記されており、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」で、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行う」と規定されています。そのため「教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。」と定められています。そのために「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開される」ように配慮しなければなりません。

* 四條畷学園短期大学 保育学科

ん。また、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習」として位置づけられており、「遊びを通しての指導」が重要視されています。そしてそれらの達成のためには「幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。」¹⁾となっています。このように幼児の教育は遊びを通して行われることに主眼が置かれていることが分かります。

(3) 自己形成としての遊び——①身体化される遊び

上述したように、本来子どもの教育は遊びを通して行われるべきものですが、「遊びとはきわめて身体的なものです。それは身体運動という狭い意味ではなく、身体的に様々な場所で様々な対象とかかわり、そのかかわっている身体が他者からも認められる存在であることを意識した行為という意味を含んでいます。」²⁾身体とはまさに生きて生活する私そのものの展開される場です。

しかし、今日の科学技術の発展は、人間を便利で快適な生活へ向かわせ、その反面我々人間が身体をもった存在であるという認識を希薄化し、自己の存在のリアリティを失わせるという事態を生んでいます。今日求められる遊びはまさにこのような身体性を取り戻す、いわば「身体化された遊び」ともいうべきものではないのでしょうか。では、「身体化される遊び」とはどのようなものなのでしょうか。ここで、非常に示唆に富む研究を紹介します。それは、H団地とN地域という二つの町の子もたちの遊び場とそこでなされる遊びの違いについて比較検討した研究です。³⁾以下に要点を抜粋します。

N地域は、自然発生的な住宅密集地であり公園等の整備も豊かではありません。しかし、子どもたちはたとえ遊び場として整えられた空間が貧弱でも、自分たちの空間的な要求あるいは社会的な要求の変化に応じて、そのつどふさわしい場所を自分たちで探索し発見するというように主体的、能動的に行為していました。

一方、計画的に整備されたH団地の子どもは、整えられた公園の空間特性を生かしながら比較的高度な遊びを行うものの、高学年になっても大きく遊び方は変わりませんでした。自分たちだけの

「居場所」探しは行われず、新しい場所が自分たちの新しい価値観で見出され選択されることもなくステレオタイプの遊びの姿が見られました。

ここから得られることは、「N地域で見られたような遊びを探索し発見する行為は、遊びが遊び場の中に閉じ込められ完結してしまうのではなく、遊びを通して『まち』と主体的にかかわり『まち』の環境を読み取り『まち』の中に自分を位置づけていくプロセスを伴っているということで、これらのプロセスを含み込んだ『遊ぶ』という身体的行為は、親、友達、親しい仲間など、『まち』の人々との社会的なかかわりの中に成立している」⁴⁾というものです。

以上のような研究からも、子どもが主体的、能動的に様々な場所で様々な対象とかかわり、かかわっている身体が多様な他者からも認められる「身体化される遊び」という、遊びの質の転換と、そのような遊びが展開される場の確保が重要であることがわかります。そして、そのような本来的な遊びが生まれ展開される場は今日自然発生的には難しい現状を考えると、大人が率先して、子どもたちが自ら遊びを通して環境と主体的にかかわり、環境の中に自分を位置づけていくプロセスを伴う遊びのできる環境構成をする必要があります。その際大人は、子どもの遊びと称して実は子どもの主体性能動性を無視し、遊びを固定化してしまうような整えすぎた環境を与えることで、逆に子どもの本来的な遊びを奪うことをしていないか慎重に見極めることが重要です。これは遊具やおもちゃに対しても同様のことが言えます。今日のそれらは完全すぎて工夫や想像力を働かせる余地がなく、遊びがその中に閉じ込められ、そこから発展していかない自己完結する遊びの状況にあります。それでは周りとの生き生きとした交わりや、遊びを通して自己を主体的に表現することが乏しくなってしまう。これらのもつ問題点に、大人は気付きもっと積極的に目をむける必要があります。

(4) 自己形成としての遊び——②身体化された遊びから想像力の世界へ

一般的に現代社会の子どもは想像力が乏しいといわれます。ここに言う想像力とは、手元にある

ものを手がかりにして、ここにはないもの、不在のものをたぐり寄せる、あるいは創り出す精神の営みをさせています。かつての日本には目に見えないものを想像する豊かな感性を育む力がありました。それは時には異界への感性や目に見えないものへの畏れや憧れなどを含む陰影にとんだ豊かな感性でした。

しかし、今日では想像力を働かせなくても、メディアが時に過剰なまでに情報提供し、想像力を働かせるどころか、減退させるまでになっています。また、子どものおもちゃも本物そっくりに精巧に作られ、そこにはないものを他で代用し見立てるという人間の想像力を育てる行為が不在になっています。さらに人と人との五感を通じたりアルコミュニケーションの減少は、自己が身体性から切り離されてバーチャルな世界に浮遊し、現実とも夢ともつかない世界をさまようような感覚が日常化する事態を生み出しています。その結果、生きる実感や喜び、いのちの輝きといったものは失せ、空洞化した精神は生き生きとした想像力につながるエネルギーを生み出せなくなっています。このような人間の内面文化の変容は、蔓延する商業主義や、因果の原理のみで物事を捉える科学万能的な思考によってもたらされ促進されました。

このような状況の中で今日求められるのは、先に述べた、「身体化される遊び」の取り戻しから、さらに日本にある従来の遊びの再検討ではないでしょうか。たとえば、伝統的な内面文化の見直しに通じる伝承遊びや、民話、昔話の価値の再考です。

例えば「かくれんぼ」は、「日常と非日常の反転する世界を経験し、日常世界を超えた多元的世界を身をもって感じる事ができた」遊びであり、「＜他者＞との相互的な＜かわりあい＞」とともに「勝者は敗者によって、敗者は勝者によって互いに救い出されるという見事な相互救済の構造が成立している」という特徴を備え、遊びの中に「加入儀礼的な空間」が漂うとされています。他に「鬼ごっこ」「花いちもんめ」「子とり」「かごめかごめ」なども同様の遊びとされています。5)

しかし、このような遊びは、異年齢の子ども集団が構成されにくく、そのため子ども同士の中で自然には伝承されにくい現状においては、大人の存在が重要な役割を果たします。今こそ、このように失われつつある児童文化の見直しにより子ど

もの精神世界の豊かさを取り戻す試みが重要であるという認識が求められます。

(5) まとめ

児童文化には子どもから子どもへ伝える文化と、大人が子どもに伝えたり与えたりする文化とがあります。今日の社会の中で子どもが心身ともに豊かに成長するには、子どもが遊びを通して学ぶ姿を大切に、身体性に注目し子どもが直接人や物や自然に働きかけ五感で世界と交わり、想像世界を広げていく働きかけが大切です。それは大人が、子どもの遊びの質の転換への目を持つこと、すなわち、遊びが自己完結してしまわないような想像性につながる自主的、能動的な「身体化される遊び」や、そのような遊びの展開される場の設定などに目を向けることです。そのためには、大人が子どもたちにどのような文化財を与えるべきか、今求められる児童文化財の特徴やその価値について深く知り理解することが大きな課題だと思われます。

註

- 1) 「幼稚園教育要領」第一章 総則 第一 幼稚園教育の基本 平成20年3月28日改正 平成21年4月1日施行 平成20年文部科学省告示第26号
- 2) 根ヶ山光一 川野健治編著「身体から発達を問うー衣食住の中のからだところ」新曜社 2003年、p45
- 3) 同上 pp40-45
- 4) 同上
- 5) 高橋勝『子どもの自己形成空間』1997年川島書店pp5-7
高橋氏は、この箇所藤田省三氏の「或る喪失の経験ー隠れん坊の精神史ー」や多田道太郎氏の「鬼ごっこ」論を取り上げ、子どもの自己形成空間とその弱体化について論じている。

ー 2009.1.7 受稿、2009.1.9 受理ー